





第3図 和鏡(1)



第4図 和鏡(2)

**鏡出土状況** 柱穴の底面から40cmほど上位から、鏡背を上に向けた状態で出土した。

**鏡の特徴** 鏡は、小型円形の銅鏡で、鏡背の文様は磨滅と腐食で判別が難しい。

第3図左の実測図を見ると、鈕(ちゆう)の右上部分、全体の5分の1ほどが約30度の角度で鏡背側に折れ曲がっている。

鈕の周りには、花芯を表現するように、小さな珠文を20数個配している。

縁の断面は、上端幅5mmほどの四角形。縁の内側は、低く細い線で区切られている。細線の外側の区画には、大ききの違う「し」字状の線を連続させ、

雲?を表現している。

外区の左上には、鏡製作後、3~4mmの不整形な穴を2個穿っている。このことから、鏡としての役割だけでなく、礼拝用などとして吊り下げられていた時期もあったことが分かる。

細線の内側の表現は、吊り下げ穴を上位にした状態(第4図)で見ると分かり易い。鏡の12時から3時までの間には、「∩」、「∪」などの線を複数用いて蓬莱山と見られる表現を施している。蓬莱山の真下には、「∩」、「し」字状の線を狭い間隔で連続させることで、水の流れと砂浜を表現している。鏡の6時から7時までの間には、一羽の鶴が右側の蓬莱山へと飛んでゆく姿が描かれている。

**【引用参考文献】**

財団法人福島県文化振興財団 2002「鍛冶屋遺跡(3次調査)」  
 『常磐自動車道遺跡調査報告 28』

**【図・写真】**

図1・2 常磐自動車道遺跡調査報告 28より抜粋。

図3・4 筆者が作図・撮影した。